

雪国の植物 ユキツバキ 13

年による着花の変化

石 沢 進

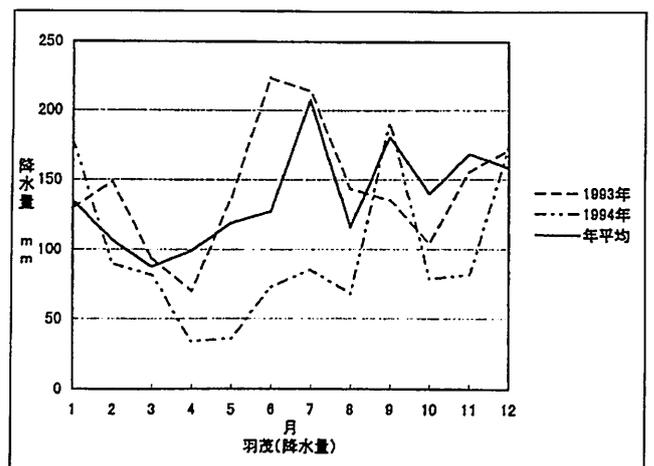
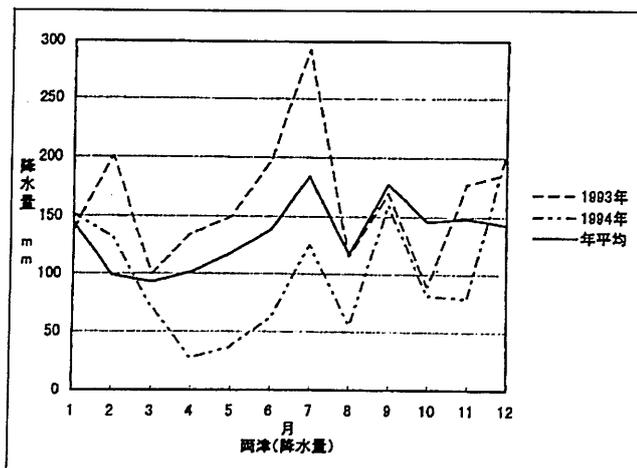
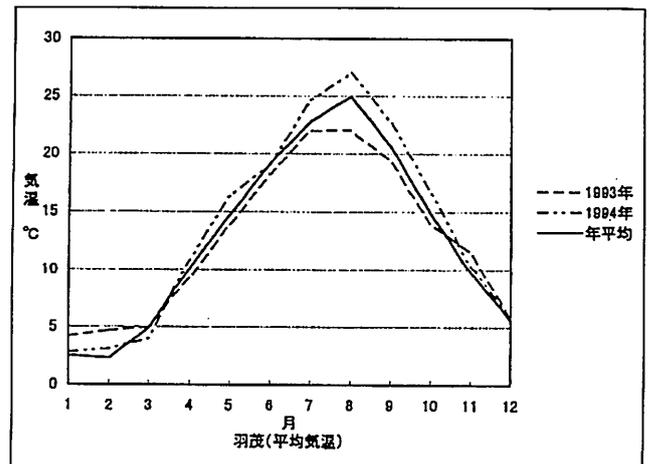
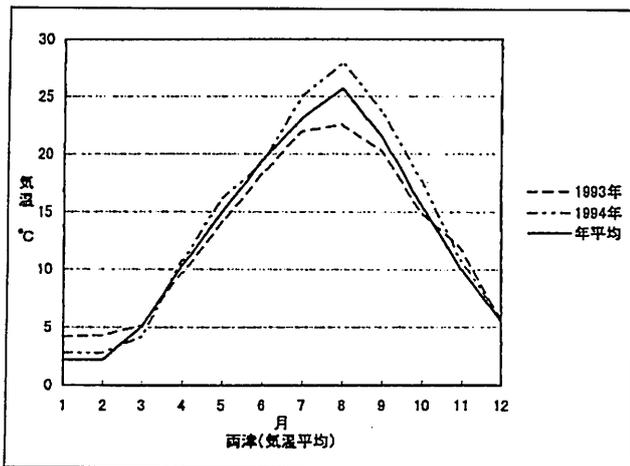
ユキツバキは、自然状態では、落葉樹の森林の林床に群生していることが多い。夏季には、森林の樹冠で日光が遮られて直射日光を長時間受けることは少なく、主として日陰の条件で生育している。春先や晩秋には、高木に葉が着いていないので、日光は林の下まで到達する。つまり高木が芽生える前か、落葉後、ユキツバキは日光を直接葉に受けることになる。夏の間、森林の樹冠で日光が遮られていることから、ユキツバキの生育地は、一般に湿度が高くてじめじめした環境条件におかれる。

ユキツバキの花芽は、6月下旬から出来始め、8月の下旬あるいは9月の上旬には、はっきりした形に發育する。花芽が分化する時期に、森林の下で生活しているユキツバキは日陰で、やや多湿の条件におかれ、花芽の着きが少ない。林縁や低木群落の中では、ユキツバキは日向で土質が乾燥する立地にも生育している。特に夏に直射日光を充分受け、

土壌が乾燥するような環境条件のもとでは、ユキツバキの花芽の着きかたが多い。

ユキツバキは、森林の林床に群生している場合、その樹には開花期になっても着花数が極めて少なく、葉の間にわずかに散在しているに過ぎない。一般に林床に生育するユキツバキは、樹全体に花が咲き乱れることは少ない。しかし、年によっては、樹林下のユキツバキに多数の花が咲くことがある。例えば1995年の春、佐渡の国見山のユキツバキには、枝という枝に花が着き、樹全体が花盛りという印象を与えるほどに多数咲いた。

要するに国見山のユキツバキは、例年、花の数が少なく、樹の枝にちらほらとみられる状態であるのに、1995年は、森林に生育している多くの株に花が一斉に咲き競い、見事な景観がみられた。



両津・羽茂における気温・降水量

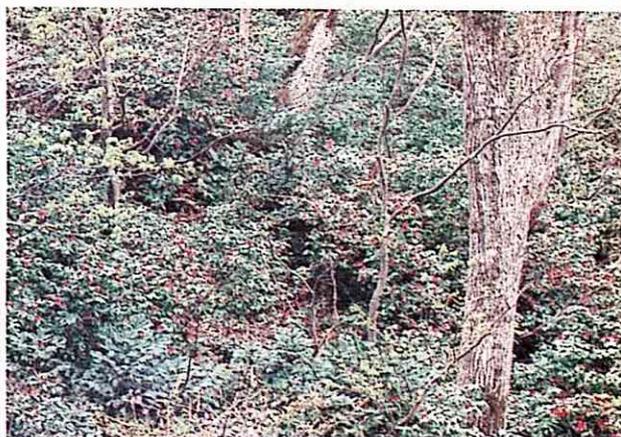
[図は新潟気象台の観測資料により、初田早苗氏の作成(年平均:1979-1990準平均値)]

花の着きかたの多い、少ないは、樹の生育地の条件に深い関連があるとみられる。1995年に多数の花が着いたが、その花芽は前年1994年の花芽の分化時期と関連があり、その年の気象条件が大きく影響していると考えられる。1994年の夏には、ほとんど雨が降らないで連日晴天が続いて年であり(図の降水量参照)、山全体が乾燥し、例年枯渇することのない湧き水がかけられるか、または著しく水量が減少したことがある。国見山の下にある瓢箪池の水量も減少し、低部に残っているものの例年の1/5以下にまで減ってしまった。国見山のユキツバキの生育地の土壌は乾燥し、植物も日中しおれるほどに乾いたとみられる。その時期が、花芽の分化時期であり、植物体内の水分が少ない条件におかれたため、多

くの花芽が分化し、その結果、1995年には多数の花が咲き乱れた、と推察される。一方1994年の春には、樹林の下のユキツバキにはほとんど花が咲かなかった。1993年の夏には連日雨が降り、例年よりも多い降水量を記録している(図の降水量参照)。実験的にも灌水する水分量を調節して、土壌水分を高く保った場合(過湿)と低く保った場合(乾燥気味)の栽培条件で、乾燥気味のツバキで花着きのよいことを確かめている。その結果を兼ね合わせ、1993年には、花芽の分化時期に土壌の湿度が高く、湿潤な条件におかれ、花芽の形成が極めて悪かったことによるとみられる。1994年と比べると夏の気候に大きな差があったことで、花の着きの多い、少ないが生じたものと考えている。



1994 4 25 (瓢箪池近く)



1994 5 3 (瓢箪池下)



1994 5 14 (中腹)



1994 5 3 (中腹)



1994 5 25 (瓢箪池上)



1994 5 3 (中腹)

[写真] 国見山における1994年と1995年のユキツバキの開花状況